ジャック・ティボーは生来の陽気さに加え、機知に富み、才気あるユーモアに溢れ、親切心と誠意を兼ね備えたヒューマニティ溢れた人柄で、多くの人々に愛された。弟子のヘンリック・シェリングは、ティボーの生前《このすばらしい人は、節度、上品さ、魅力、教育の天賦の才能の全てを持っていた。彼は今日でも、現存するフランスの最高のヴァイオリニストとして、なお私の心の中に残っている》と述べている。

この本は4つの章に分かれ、第1章ジャック・ティボー年譜は、日付を追って彼の略伝を記し、死ぬまで現役演奏家として世界各地で活躍した足跡をたどり、第2章ジャック・ティボー・イン・ジャパンは、昭和3年(1928年)と昭和11年(1936年)の2度、わが国を訪れた在日中の記録と戦後昭和28年(1953年)、3度目の来日途上に起きた飛行機事故による悲劇的な死の顚末(てんまつ)、第3章は約半世紀におよんだ彼の録音歴をたどる出来るだけ詳細なディスコグラフィと作曲家別曲目索引、第4章はわが国で発売されたティボーに関する文献・資料の一覧と参照した参考外国文献を掲載した。

なお、この拙作が世のティボー・ファンや研究者の皆様に、少しでもお役にたつならば幸いである。

1993年 早春

練馬・大泉の里にて

殿木敏達 識

目　次

まえがき……1

第1章　ジャック・ティボー年譜(1880年～1953年)……9

第2章　ジャック・ティボー・イン・ジャパン

第1次来日・昭和3年(1928年)……69

1　リサイタル・スケジュールと曲目……71

2　演奏会評……73

牛山 充、小松耕輔、近衛秀麿、あらえびす

3　ティボー歓迎会……77

第2次来日・昭和11年(1936年)……78

1　リサイタル・スケジュールと曲目……79

2　演奏会評……81

大田黒元雄、塩入亀輔、野村光一、河上徹太郎、
増沢健美、西條卓夫

3　ティボーの演奏スタイル……87

4　人間ティボーの一夜……89

5　ティボーのレヴュー見学……91

6　日本ビクターでレコード初吹込み……92

7　ティボーのラジオ放送……93

8　わが国の音楽家による歓迎会……95

9　短編音楽映画の試写会……96

10　ティボー会見記：西條卓夫……98

11　歌舞伎小屋のティボー：上村健一 ……106
12　タッソ・ヤノプロの見た日本（付・タッソ・ヤノプロ略伝）……108

第3次来日の挫折・昭和28年（1953年） ……114
1　幻のリサイタルと曲目 ……114
2　日本への出発と飛行機事故 ……116
3　ティボーの思い出と追悼文 ……119
大田黒元雄、深尾須磨子、吉田利雄、池内友次郎、野村光一、西條卓夫、海藤日出男、P.カザルス、A.コルトー、M.ロン、D.オイストラッフ
4　「貞明皇后をしのぶ」幻の演奏会……128
5　ジャック・ティボー追悼演奏会 ……128
6　パリにおけるティボー音楽葬 ……129

第3章　録音順ディスコグラフィ（1905年～1953年） ……133
Chronological Discography (1905～1953)
1　旧吹込時代の録音（Acoustical Recordings）……139
2　電気吹込時代の録音（Electrical Recordings）……177
3　ティボー指揮のレコード（Jacques Thibaud as Conductor）……251
4　ティボー未刊行の録音（Unpublished Recordings）……254
作曲家別曲目索引 Composer Index to Items……265

第4章　ジャック・ティボー和文文献・資料一覧 ……273
参考外国文献……311
あとがき ……313

凡　例

1.　この本で参考にした和文文献・資料の中には、戦前の旧字体、旧かなづかいのものがかなり多いので、引用する場合には、常用漢字、現代かなづかいに改めた個所があります。

2.　人名、曲名についても、現在通用されているものに改めた。

3.　参考文献・資料の表示については、和文の場合は例えば［文献・和-12］、外国語の場合には［文献・洋-5］のように記した。

述懐を見ても、明るく、気取らない性格であり、生まれつき親切心に溢れていた。世界中へ演奏旅行を行う余暇の乏しい生活の中でさえ、友人の世話をやき、将来有望な若者に対する助力を少しも惜しまなかった。彼に会った人々は、才気溢れるユーモアと機知、気前の良さと思いやりに感動し、たちまち彼のとりこになったという。

第２次大戦後の昭和28年(1953年)、荒廃したわが国がやっと再建の途につき始めたころ、親日家のティボーは17年ぶりに来日することとなった。前年の12月4日づけ読売新聞夕刊紙上に来日受諾の記事がのって以来、彼のファンは、一日千秋の思いで演奏会の日を待ち望んでいた。私は当時、東京駅八重洲口近くの会社に勤めていたが、９月２日夕刻、ティボー遭難の報に接し呆然自失、夢遊病者のように銀座まで歩き続けたことが、４０年を経たいまでも昨日のことのように思い出す。西條卓夫氏がティボーの訃報に接したとき、《私は悲しさを通り越していたのである。二日経った今でも、音楽への情熱が一切、さめ果てたような気がしている……。》と述べられているが、全く同感で、それほどティボー・ファンにとってこのアクシデントによるショックは大きなものであった。しかし、彼の数々の名演がレコードに残されているので、我々はいつでもどこでも好む時に鑑賞出来るということは、何という幸福であろうか。この類い稀な芸術家ジャック・ティボーに永遠の栄光あれ！

この本の就筆にあたり、EMI Music Archives, Hayes, 東芝EMI株式会社を始め、数多くの方々からご指導、ご助力を賜った。ここに深甚なる感謝の意を表する次第である。とくに外国文献では、最も実証的なクリスチャン・ゴーボール/ジェラール・ドゥリュー両氏共著の『ジャック・ティボー』を参考にした。

また出版に際し、編集上の示唆を数々いただいた原浩一郎氏に心から御礼申し上げる。

著　者

著者経歴

殿木敏達(とのき・はるさと)

1927年東京生まれ。慶應義塾大学法学部卒業。会社勤務を経て、1980年から1990年まで東京・新宿区でクラシック輸入盤専門店経営。1985年６月から同年10月まで『レコード芸術』誌（音楽之友社刊）へ５回にわたり“ジャック・ティボー・ディスコグラフィ”を掲載。

ジャック・ティボーの世界

1993年６月15日　初版発行　©

頒価 2800円

著　者　殿木敏達

発行者　殿木敏達

〒178 東京都練馬区大泉学園町1-25-2

振　替　東京 3-27986（殿木敏達）

印　刷　星野精版印刷

製　本　上園製本

© Harusato Tonoki, 1993

Printed in Japan

▶裏表紙の写真は，ティボー愛用の1709年製ストラディヴァリ“バイヨー”